

## 『六合雜誌』における村井知至

辻 野 功

はじめに

村井知至の一九三八年の日記に、次のような一文がある。

四月二十二日（金）曇

○昨夜不眠の為め色々のことを考えている内に、己が過ぎ越し方と現状の身の上が不思議な程安部磯雄君と相似てゐることを感じた。同志社に於いて同じ教育を受けたばかりでなく、卒業後安部君は岡山に暫く牧会に従事する、私は今治にゆき伝道に従事す。その内君も妻帯、私も結婚。それから米国に行き、君はハートフォード神学校に学び、私はアンドバー神学校に学ぶ。帰朝後君は早稲田大学に就職多年教育に従事す、私は東京外語大学に就職して二十有余年教育をやる。又家庭

『六合雜誌』における村井知至

に於ては君も七人の子を挙げ、私も亦然り。而してその中安部君はふじ子さんを亡くし、私は花子を亡くす。他の六人は女四人、男二人。私も同様にして、皆成長してそれぞれかたづき、君も私も子供に就いては卒業。妻君こまをさんは実に忠実なる方にて、此点亦我妻に似ている。そうして君も私も七十年余の長命を享け、今尚槽糠の妻と共に幸福なる日を送り、老齡ながらも身に病なし。何から何までよく似てゐるに驚く。そうして二人共誠に仕合せな幸福な日だ。ただ晩年君は政界に入り名を上げ、私は老後平凡な日を送っている。この点は君に一步をゆづる。感謝又感謝。

安部磯雄と同志社において同級生であり、卒業後不思議な程相似たる道を歩んだ村井は、しかしながら同志社入学までは、

安部とはよほど異なった道を歩んできた。村井知至は一八六一年（文久一）九月一九日、村井観蔵の長男として、松山に生まれた。姉一人妹一人にはさまれた唯一人の男児で、幼名は房之丞であったが、式三郎を経て知至になった。知至は格物致知に由来している。

村井が学んだ愛媛県変則中学校（松山中学の前身）の草間時福先生の影響を受け、彼は商人を志し、一八七六年（明治九）夏上京して三菱商業学校に入学し、二年程そこで勉学に励んだ。しかし開学間もない三菱商業学校は、いまだ内容が整備されておらず、不満を感じた村井は、学校を中退し、一八七八年（明治一）横浜に赴き商館の丁稚になり、実地に商業貿易を学ぼうとした。かたわらアメリカ人宣教師バラの経営する英語学校に入学して英会話を学んだ。その後横浜税関吏試験に合格して勤務についたが、元来が虚弱な体質であったためか、一週間たぬうちに病に倒れ、連日三八度の熱が続いた。チブスであったらしい。税関は首になり、病の床で体は動かず、貯えは底をつき、彼は悲嘆のどん底に陥った。しかしそこに救いの手が現われた。彼はキリスト教に回心したのである。

村井は元来が大の耶蘇教嫌いであった。彼はバラの英語塾入学の際のやりとりを、次のように回想している。

私は其頃耶蘇教が大嫌ひで、耶蘇にせられては大変だと思ひ、バラ校長に会つて「私は御校に於て実用向の英語を教へて貰ひたい。承る所に依れば此学校は耶蘇教の学校ださうだが、耶蘇教は私の大嫌ひ、耶蘇教を教へて貰つては困る、英語だけを学びたい」と云ふた。校長はニコニコ笑つて「あなた宜しい、英語だけで宜しいあります」と答へた。それで早速翌日から通学することになった。<sup>(2)</sup>

その耶蘇教嫌いの村井が、回心したのである。その過程を村井は、次のように記してゐる。

その時、其処に救の手が現われたのであった。即ち先志学校の先生達が毎日のように見舞に来て、懇々と信仰の話をし下さる内、忽然として私の眼は開かれ、まぶしいばかりの光明を認めたのである。（中略）病気の癒ゆるや否や横浜海岸教会の稲垣信先生から洗礼を受け基督教信者となった。其時の歓喜は殆んど言語に絶する位で、天地万物が全く新たな相を呈し、自分は生れ変りて新天地に移されたやうな気分になり、殆んど狂気の沙汰で逢う人毎に神の福音を宣伝し、或時は路傍に立つて説教したこともあった。<sup>(3)</sup>

このような時、彼は同志社卒業の河辺久治と親友になった。村井は河辺から、商業を志すにしても普通教育という広い土台を築いておかねば将来の大成はないと忠告され、同志社への進学を強く勧められた。村井は信仰に燃えている時のことでもあり、同志社に入学すべく、横浜を後にしたのであった。

一八八〇年（明治一三）九月同志社普通科三年に編入学した村井知至は、そこで新島襄から決定的な影響を受けた。その影響を、村井は次のように回想している。

私は同志社入学以来卒業まで三ヶ年を同校に過したのであるが、其間私の得た最大のもので云へば、いふまでもなく新島先生の精神とその感化とである。（中略）一言で云はゞ先生は基督教の偉大なる精神によりて浄化され聖化されたる大和魂の持主であった。……実に救国済民の四字は先生の魂であった。私は入学の当時尚貿易を以て将来の目的としてゐたのであるが、遂に先生の精神に感化され、日本国民の精神的救済を以て、我が畢生の事業とするに至ったのである。<sup>(4)</sup>

同志社入学以後の村井知至は、冒頭に掲げた日記にある如く、安部磯雄と相似たる人生を歩むようになるのであるが、村井は同志社で、同級生の安部磯雄・岸本能武太と生涯変わらぬ親密

『六合雑誌』における村井知至

な交友関係を築き上げた。村井・安部・岸本の親密な交友関係は、「三幅対と云はれた」<sup>(5)</sup>と、村井は回想している。また安部は、この三人にさらに同級生の新原俊秀・山岡邦三郎を加えた五人を、「五友」<sup>(6)</sup>と呼んでいたと回想している。

この交友関係は、日本の社会主義運動にとって決定的に重要であった。というのも、日本の社会主義運動の起源は、一八九八年（明治三一）一〇月に結成された社会主義研究会であるが、この社会主義研究会に「五友」中の四人村井・安部・岸本・新原が加わり、なかでも村井・安部・岸本の「三幅対」はその中心メンバーであった。このことは、次にあげる社会主義研究会の例会の発表者の顔ぶれからみても、そう断定できるのである。

第一回例会 一八九八年一〇月一八日

村井知至「社会主義綱要」 高木正義「社会主義研究に要する参考書の紹介と研究方針」

第二回例会 十一月二〇日

河上清「英国の地主制度」

第三回例会 一八九九年一月一五日

岸本能武太「サン、シモンの社会主義」

第四回例会 二月一九日

河上清「フリーエの社会主義」 豊崎善之助「ルイ、ブラン

同志社法学 三三卷一号

一五一（一五一）

及ブルードンの社会主義」

第五回例会 三月一九日

片山潜「フェルヂナンド、ラサルの社会主義」

第六回例会 四月一六日

村井知至「カール、マルクスの社会主義」

第七回例会 五月二八日

安部磯雄「ヘンリー、ジョージの社会主義」

第八回例会 六月二五日

幸徳伝次郎「現今の政治社会と社会主義」

第九回例会 一〇月二二日

安部磯雄「社会主義研究の方法」 河上清「市街鉄道論」

第一〇回例会 十一月二六日

安部磯雄「ニュージールランドの土地制度」

第一一回例会 一九〇〇年一月二八日

北川筌固「普通選挙に就て」

こう見てくると、日本社会主義運動の一大源流は同志社であったと言つて過言でないのである。そして同志社卒業生が主流を占めた社会主義研究会の会長を務めたのが、村井知至であった。

足かけ一三年ぶりにアメリカから帰国した片山潜が社会主義

研究会に加わつたのも、村井との関係からだと思われる。<sup>(8)</sup> いうのも片山が一八九二年（明治二五）アンドーヴァー神学校に入学した時、村井が在学しており、そこで知り合つて以来、両者の親密な交友関係は日本へ帰国後も続いていたからである。ちなみに村井は一八九九年（明治三二）七月に、日本社会主義運動史上初の体系的な社会主義の理論書『社会主義』<sup>(9)</sup>を公にするが、それは片山の労働新聞社からであった。

平民社創立後、キリスト教社会主義者にとつてかわつて社会主義運動のリーダーシップを握ることになる幸徳秋水が社会主義研究会に入会したのは、周知のように、秋水が『万朝報』に発表した「社会腐敗の原因と其救治」が機縁となつて、村井・片山から連名で入会を勧誘されたからである。

既に述べたように黎明期の社会主義運動は、社会主義研究会を中心に展開されたのであり、その中心人物は会長の村井知至であった。その村井が論陣を張つたのが『六合雑誌』であった。ちなみに『六合雑誌』は毎号「社会主義研究会記事」を掲載し、あたかも社会主義研究会の「機関誌たるかの観を呈し」<sup>(10)</sup>ていた。したがつて『六合雑誌』に発表された村井の論文を究明することは、村井知至個人の研究にとつてのみならず、黎明期日本社会主義運動の研究にとつても不可欠の課題なのである。

## 一 信仰の変遷

村井知至が『六合雑誌』に発表した論文は、次の二三篇であり、執筆の最も多い一人であった。

- ① 基督の教に関する歴史的研究法 第一六一・二号（一八九四年五・六月）
- ② 使徒保羅の基督論 第一六七号（一八九四年一月）
- ③ 欧米大学学生社会事業 第二〇五号（一八九八年一月）
- ④ 「基督の名によりて」てふ觀念に就て 第二〇八号（一八九八年四月）
- ⑤ 予が信仰變遷の三時期 第二一一号（一八九八年七月）
- ⑥ 社会主義の教育案 第二一二号（一八九八年八月）
- ⑦ 「ユニテリアニズム」の本領 第二一六号（一八九八年二月）
- ⑧ カール・マルクスの社会主義 第二二一号（一八九九年五月）
- ⑨ 基督教の社会的方面 第二二三号（一八九九年六月）
- ⑩ 基督教の新傾向 第二二五号（一八九九年九月）
- ⑪ 日本「ゆにてりやん」協会の真相 第二二七号（一八九九年一月）
- ⑫ 予が理想する宗教的生活 第二三〇号（一九〇〇年二月）

『六合雑誌』における村井知至

- ⑬ 近時我國に於ける宗教思想の傾向 第二三八号（一九〇〇年一〇月）

- ⑭ 欧米に於ける「ユニテリアン」の大勢 第二三九号（一九〇〇年十一月）

- ⑮ 青年自修論 第二四〇号（一九〇〇年十二月）

- ⑯ 社会の三大理想を論じて社会主義に及ぶ 第二四一号（一九〇一年一月）

- ⑰ 二十世紀の宗教 第二四二号（一九〇一年二月）

- ⑱ コムトの人類教を評して我が信仰の立場を明かにす 第二五〇号（一九〇一年一〇月）

- ⑲ 婦人の特性 第二六五号（一九〇三年一月）

- ⑳ 人生の好伴侶 第二七二号（一九〇三年八月）

- ㉑ 基督教三綱領―神と我と人と 第二八〇号（一九〇四年四月）

- ㉒ 非宗教時代 第三六四号（一九一一年四月）

- ㉓ 眞人物 第三七〇号（一九一一年一月）

以上の論文はいくつかのグループに分類することができ、拙稿でもグループごとにまとめて論じるが、その前にまず⑤「予が信仰變遷の三時期」を紹介しておきたい。「抑も予が基督教を信ぜしは明治十四年の昔にして」の文章で始まるこの論文に

において、村井は自分の信仰変遷を三時期に分けて回顧している。信仰を始めた第一期は、「智識なき熱心の時代」で、「世の智識学問の如きは更に顧みさりしのみならず、甚しく之を厭忌して悪魔が信仰を惑はす道具なるかの如く思惟し……密室の祈禱と聖書の研究をのみ維れ務め……殊に聖書を愛読するに切にして、時には我れ聖書の外何をも知るまじと決心したる事さへあ」つた程である。しかるに一八八九・九〇年（明治二二・三）頃より、村井の「信仰に一大動揺を生じ」た。村井はこの時期、直接金森通倫の教えを受け、さらにヴェント（Wendt, Hans Hinrich (1853-1920)）の『イエスの教え』の影響を受け、信仰の基礎を学問・知識によって再構築しようとした。しかしこの時期は、後になって振り返ってみると「熱心なき智識の時代」であったと、村井は総括している。そしてこの時代も「稍々暫くにして予が心に尚ほ物足らぬ感をなし始め（中略）抑も熱心と智識は遂に両立並存する能はざるものなるか」と深刻に悩んだ。村井の第一回渡米は一八八九年（明治二二）夏から一八九三年（明治二六）夏にかけてで、アンドーヴァー神学校に学んだのであるが、この時期は村井の信仰変遷の第二期にあたる。「熱心と智識」の「両立並存」を強く求めた村井は、日清戦争後の日本社会紹介の講演旅行も兼ねて一八九五年（明治二八）再び渡米した。彼の言葉によれば、「『求むる者は得尋ね

る者は逢ひ門を叩く者は開かる』との聖句に違はず……在米中枳然として此問題を氷解するの機を得た。」というのはたまたま訪れたアイオワ大学の図書館で、ヘロンの『尚ほ大なる基督』を読み、感激した村井は直接著者を訪問して教えを乞い、それが機縁となって、帰国の予定を変更して著者が教鞭をとるアイオワ大学で研究に従事した。その結果村井は、『所謂』宗教的思想よりも社会的思想に心インテレスト念を置くの傾向を生じ、（中略）現時の社会が根本的改良を要するを悟り、基督教の武器を執て世と戦はんと欲するの熱心を奮起」したのである。これこそ、信仰変遷の第三期「知識と熱心調和の時代」であった。

村井がこの論文を執筆したのは、社会主義研究会会長として活躍していた時期にあたり、また『六合雑誌』にも最も精力的に数多くの論文を発表していた時期にあたる。この時期、彼はキリストの教えに従って「現社会を改造して理想の天地たらしめん」とし、そしてそうすることこそキリストの教えに真に適う途だと確信していたのである。

## 二 キリスト論

村井の論文は、自伝的な「予が信仰変遷の三時期」を別にし、六分野に大別しても差し支えない。第一は、彼のキリスト教理解を表わす論文である。まず村井は、①「基督の教に関する

る歴史的研究法」を明らかにする。彼は、キリストが真に如何なる人物であり、キリストの教えが如何なるものであるかを知るためには、「決して普通の学術的方法、手段、また其材料等を要せず、たゞ己が精神を深くし、直に活ける基督に親炙するを以て足れりとする」方法は、「基督教の基礎を危ふするものにして、決して健全なる思想に非らざるなり」と強く否定し、「吾人の信仰を、健全ならしめんには、常に歴史的耶蘇の人物に接」し、「想像の基督にかへて、ナザレの耶蘇に帰依し」なければならぬと主張した。そして『旧約聖書』↓『旧新両聖書』の中間に於ける猶太人の宗教文学↓「四福音書に於ける基督の教の材料」↓「使徒時代の宗教文学」という材料と順序によってキリストの教えを究明すべきだとした。「四福音書に於ける基督の教の材料」の箇所では、村井は「吾人の求むる基督の教の直接なる材料は、共観福音書、及び第一第三福音書中に存する、耶蘇の『ロギヤ』なり」として、「基督の教に関する歴史的研究法」の一番の強調点がここにあることを示した。

次の②「使徒保羅の基督論」は注目すべき論文である。聖書に関する歴史的研究の一大成果は、キリストの教えとポーロの教えとの間の著しい違いを明らかにしたことであるとされている。村井はキリストの教えとポーロの教えとの間に甚しい相違があるとはしなかったが、「去れども保羅の教にして一の大に

『六合雜誌』における村井知至

耶蘇の教と趣を異にする処のものは、イエス、キリストなる人物を立て、之を凡ての教説の中心点となすにあり」とした。そして村井は、「古来基督教会の歴史に於て基督が教会思想の中心となり、彼に関する教説が神学思想の要部分を占め、議論百出今日尚ほ尽きざる所以のもの、蓋し其の源を使徒保羅の教に帰するは決して不当なりと云ふ可らず。故にキリストに就て思料せんとする者は須らく先づ使徒保羅の基督論を攻究するの必要あり」として、まず「キリストと神との関係」を、「保羅はキリストと神との間には殆んど他の人類が有せず又た有すべからざるが如き、密接にして独有の関係あるを認めたるものゝ如し」とした。次に「キリストと他の人間との関係」において、村井は、ポーロが「キリストを神に劣りたる者となすは明かなり。去らばキリストと他の人類との関係に就き彼が所見如何と問わんに、予は彼がキリストを視ること甚だ高く殆んど絶対的に他の人類と区別せるを發見す」とした。「キリストの人物」の箇所では、ポーロは「基督の人物を分ちて霊、肉となし、此二側面より立論」し、キリストは「他の人間と均しく自然法によりて生れ其肉体は尋常人の肉体に異なら」ないが、「精神の上に於ては完全無欠にして神聖を以て満さ」れ、キリストは「神の象にして人の理想たる霊の存在者」とみた。すなわちポーロによればキリストは「人の肉体を仮りて世に生まれた」の

であった、と村井は論じたのであった。このようなポーロの基督論には、ポーロがユダヤ人であったことからくる、「抽象的觀念力に乏しく、凡て形而上の觀念を有形的物体として心に観る」という思想的欠陥があるのであって、ポーロの言葉を「機械的に盲目的に解釈し、而して得々然として我は保羅の教旨を解し得たり」とするのは、「謬見も亦甚だし」いものであって、「今日吾人が保羅の思想を解釈し之れを世に紹介せんとするに当ては、宜しく彼が思想の形骸と精神とを識別し、前者を棄て後者を採り、之を現代の思想に釈出するを勉めずんばあるべからず」と、村井は主張したのであった。

④『『基督の名によりて』てふ觀念に就て』において、村井はまず「倩々顧ふに『基督の名によりて』てふ觀念は、古往今来基督信徒の意識中、最も神聖なる意義と最も強大なる勢力を有するものなり、是れ即ち基督を以て、上帝と人類の間に於ける唯一の中保者インターセッサなりと信ずるの意」であるが、「予は基督教を信ずること爰に数十年、此間予が最も苦しみたるは、即ち此の『基督の名によりて』てふ觀念に対する予の疑惑なりしなり」と、自分の問題意識を鮮明にした。そして「基督の名によりて」という觀念が歴史的に如何に形成されたかを、ユダヤ国民宗教思想の影響・ギリシア国民哲学思想の影響・ローマ国民法律思想の影響の面から考察した。その後「此信仰思想は果し

て合理的なるや否や」を、進化説の出現・高等批判学の勃興・神学思想の歴史的研究の進歩の三側面から検討し、「十九世紀學術思想の進歩は此教説を根本的に破壊しつつある」とした。そして村井は、「惟ふに神人中保てふ思想ほど基督の嫌忌したるものはなかりしならん」と断言したのであった。

『『基督の名によりて』てふ觀念』から一〇年後に発表した⑤「基督教三綱領Ⅱ神と我と人」において、村井は「基督教の死活問題は三位一体論にあらず、基督神性論にあらず、唯神に対する信念の存否にある」とし、「予が神を信ずる信仰の基礎は何れにあるかと云ふに此宇宙に整然たる法則の存在することである」と神に対する自覚を表明した。次に「我てふ自覚を滅殺し之を撲滅するのは、基督教の傾向ではない」と、我に対する自覚を述べた。そして三番目に、「神を信ずるとは愛の道を信ずるのである。神と共に活くとは愛の生涯を送るを意味するのである。(中略)愛神と愛人とは文字異なれども事實は一つである」と、人に対する自覚を展開した。そして最後に神と罪と贖が保守派キリスト教の三綱領であったが、「自由基督教の三綱領は神に対する自覚(Divinity)と我に対する自覚(Individuality)と人に対する自覚(Humanity)とである。是れ即ち基督の宗教である」と、村井のキリスト教論をまとめたのであった。

### 三 ユニテリアニズム

以上のようなキリスト教理解に立つて、村井はユニテリアニズムこそ現代のキリスト教であるとの立場を明らかにした。まず⑦『「ユニテリアニズム」の本領』において、村井は正統派キリスト教徒から破壊的偏理的で異宗教に対しあまりに包容的でキリスト教的特色を失っていると攻撃されるユニテリアニズムの本領を、「人類に対する信仰」・「人類に対する希望」・「人類に対する熱心」の三点にわたって明らかにした。まず「人類に対する信仰」において、正統派が「人性を以て全然墮落したる者とし、人は罪惡の塊にして蟲よりも尚ほ賤しき者と見做す」のに対し、ユニテリアニズムは「人類の神性を信」じ、「基督は只だ我等の裡に潜める神性の最も自由に最も完全に開発せしものなりと観するのみ」と、村井は論じた。次に「人類に対する希望」において、「正統派基督教徒が人類の理想として欽慕する所は常に過去に在」るが、ユニテリアニズムは「将来の人類が過去歴史の進歩を継ぎ、過去偉大なる人物の感化を享け、以て過去歴史の未だ産出せざる尚ほ完全なる社会と尚ほ完全なる人物とを将来に造出せんことを熱望して止まざるもの」であることを明らかにした。第三に「人類に対する熱心」においては、正統派キリスト教徒が「人魂を地獄の中より救ひて、未来

『六合雜誌』における村井知至

天国の保険を与へんと欲する」けれども、ユニテリアニズムは「現社会に於ける人々の究苦を減じ、目前に横はる人類の不幸を救ひ、現社会を改造して正義と幸福の充満する黄金時代即ち『神の国』を建設せん」としているのだと述べた。以上三点にわたって正統派キリスト教に対するユニテリアニズムの相違とその優越性を論じた村井は、このようなユニテリアニズムの立場こそナザレのイエスが唱道してやまなかった宗教であると主張したのである。

⑩「日本『ゆにてりやん』協会の真相」においては、理性を信ずること（合理的）、道徳を主とすること（倫理的）、死後未来ではなく現世の人類の救済と幸福を目的とすること（社会的）、すなわち真理・正義・幸福を目的とすることがユニテリアニズムの三大綱領であると論じた。次に村井は⑪「近時我国に於ける宗教思想の傾向」において、日本でユニテリアニズムが必要とされた思想上の理由を明らかにした。

村井知至は一九〇〇年（明治三三）五月ボストンで開かれた万国ユニテリアン大会に平井金三と参加し、これを機会に欧米各地を視察したのであるが、その結果を惟一館で講演したものが⑫「欧米に於ける『ユニテリアン』の大勢」である。彼は欧米におけるキリスト教が「社会的宗教に強き『エンファシス』を置いて居る」ことに、大いなる共鳴を覚えたのであった。

#### 四 社会的キリスト教

以上村井が明らかにした如く、ユニテリアニズムの特質は合理的・倫理的・社会的なところにあるが、その中でも彼は社会的であることを最も重視した。すなわちキリスト教の本領は、社会的方面になければならないとしたのである。キリスト教＝ユニテリアニズム＝社会的キリスト教を、村井は主張したのである。

この点を明確に論じたのが、⑨「基督教の社会的方面」である。村井によれば、キリスト教徒の二大戒律は「爾心を尽し精神を尽し力を尽し意をつくして主なる爾の神を愛すべし」と、「己の如く爾の隣人を愛すべし」である。前者は神と人との関係を教えたキリスト教の宗教的方面であり、後者は人と人との関係を教えたキリスト教の社会的方面であり、「二者相俟って其完きをな」すのに、キリスト教会が近代に至るまで宗教的方面のみを重視し、社会的方面を等閑視してきたのは、大いなる誤りであると村井は主張した。しかしキリストの偉大であったのは、「人類を大観して隣人とし、之に対する同情と熱愛とを其生涯に実現したことにあり、キリストの生涯は「今日の基督教徒が思ふ程に『所謂』宗教的なものではなく、寧ろ社会的――近世の言葉で云い表はせば――ものであり、したがって「基

督教の基督教たる本色は寧ろ其の社会的方面に存する」と、村井は論じた。そして激烈なる自由競争・残酷なる独占事業に苦しみ隣人を愛し救うことこそ、現代におけるキリスト教徒の使命であるとして、村井は「社会的基督教」を唱道したのであった。

続く⑩「基督教の新傾向」において、宗教が陥りやすい誤った傾向は三つあり、第一は寺院的・出世間的になる傾向、第二は逆に世俗的になり政治的野心を貪る傾向、第三は理屈的・神学的になる傾向であるが、キリスト教はこのような傾向に陥ってはならず、健全な途を歩まねばならない、その健全な途とは社会的傾向、すなわち「現社会を改良して愛の王国を建設せんため全心全力を傾注するの傾向」であると、村井は論じた。そしてこの社会的傾向こそ、「実に初代基督教の復活にして今日の基督教が再び健全なる発達に向ひつゝあるを示すものである」と、村井はその信念を表明したのである。

さらに村井は⑪「欧米大学学生社会事業」において、社会的キリスト教が最も活発に実践に移されている欧米の学生のセツルメント運動を、自分の直接の見聞と研究に基づいて紹介したのである。

## 五 社会主義

ところで村井にとって、以上のような社会的キリスト教の提唱は、すなわち社会主義の提唱であつた。⑥「社会の三大理想を論じて社会主義に及ぶ」において、村井は次のように論じた。自由・平等・博愛は社会の三大理想であるが、「個人主義者は自由てふ観念を主とし、平等、博愛てふ観念には比較的重きを置かな」かつたため、「自由主義は端なく政治界より経済界に押及ぼされ、経済界の自由主義は放任主義を意味し、放任主義は競争主義を意味し、為めに惨憺たる強食弱肉の修羅場を演じ来り、其結果平等は忽ちにして其影をかくし、社会は貧富の二大階級を産出し古今未曾有の不等等を人々の間に見るに至」り社会に博愛は行なわれなくなった。今や博愛を主とし、自由を従とする第二の革命を起さなければならない。個人主義は自由・平等・博愛と言つたが、今やその順序を転倒させて博愛・平等・自由とせねばならない。そしてこの立場こそ社会主義である、村井は主張した。村井にとって「社会主義は基督教と異名団体」であり、「基督教の精神を取って広く之を社会に応用し新天地を此世に來たす者は今日の基督教会にあらずして社会主義者の運動であ」り、「社会主義は応用基督教と称すべき」ものであつたのである。

『六合雜誌』における村井知至

村井はすでに一八九九年（明治三二）に公にした『社会主義』の中に「社会主義と基督教」なる一章を設け、「欧米近今の事実に徴すれば、社会主義と基督教とは恰かも仇讎の如く氷炭相容れず、基督教徒は一般に社会主義を忌み、社会主義者は亦盛んに基督教に反対せり、然れ共是れ近代の基督教が俗化し貴族的となりしが故にして、初代の基督教に至っては大に社会主義と相似たるものありしなり、否啻に相似たるのみにはあらずして、全く其精神思想を等しくし殆んど異名団体の観ありき」として、次の七つの理由をあげているのである。

- 第一、各其理想と目的を一にせり。
- 第二、其道を伝ふるの熱心相似たり。
- 第三、等しく社会の迫害に遭へり。
- 第四、伝播の速かなること相似たり。
- 第五、其思想に於て俱に世界的なり。
- 第六、等しく貧民に対して同情の涙を濺げり。
- 第七、俱に兄弟相愛するの美麗なる精神に富めり。

⑥「社会主義の教育案」は、社会主義者が唱える積極的社会建設のプログラムの中でも村井が特に共鳴した義務教育制度案の紹介である。この中で、村井は第一に「教育を受くるは各人

が先天的に有する権利」であり、第二に「教育の普及を要求するは社会の権利」であり、第三に国家的教育制度を主張するのは「未だ生れぬ後世の子孫に対する義務」であるとして、義務教育制を提唱した。この「社会主義的教育案」の中において、村井は「社会主義に頭を突込んで之を研究する内こゝに吾が求めたる真の基督教があったと云ふことを自ら悟る様になりました。一度死して葬られたる基督教の信仰を新に私の心に甦らさしめたるは実に社会主義のお蔭であります」と、彼のキリスト教と社会主義への信仰を告白しているのである。

⑧「カール、マークスの社会主義」は、社会主義研究会第六回例会での村井の報告であった。村井は「近世の社会主義を知らんとせば、カール、マークスの社会主義を研究せざんばあらず。彼は社会主義の歴史に於て最も著名なるのみならず、実に彼は近世の科学的社会主義運動の泰斗なりとす」として、マークスの略伝を紹介した後、マークスの思想を価値論（＝価値論のこと）・資本論・理想的社会・社会進化の歴史の四点にわたって詳しく紹介した。村井のマルクス紹介は、本格的なものとしては日本の嚆矢をなすものであり、村井の社会主義理解が他に抜きんでていたことを証明するものであった。

## 六 人 生 論

以上のようなキリスト教理解・社会主義理解に基づいて、村井は「人生如何に生くべきか」の人生論をいくつか発表した。まず⑩「予が理想する宗教的生活」では、「宗教的生活といへども或る意味の宗教的生活は予が最も厭ふ所のものゝ一つである。即ち迷信的宗教的生活である。是程いやらしきものはない」と書き出し、「自己を中心とする宗教的生活」・「人類を中心とする宗教的生活」・「天地を中心とする宗教的生活」について、順次論じた。まず「自己を中心とする宗教的生活」は、「専心自己の徳を修め自己の品性を高むるを以て主一の目的となし畢生の事業とする生活」であるが、このような生活をする人は、「未だ心に神を自覚せず、又た口に神の名を唱へざれども、其實、彼等は神を求め、神に近づかんことを勉めつゝある者」であり、村井が「理想する宗教的生活の一つ」であった。次の「人類を中心とする宗教的生活」は博愛献身の生活であって、自己修養を目的とする生活より優り、この生活をする人は「自己を思ふに暇なく、神てふ意識も全く強くなかった」が、「其実純正の宗教にして又有神論者」であり、村井が「理想する宗教的生活の一つ」であった。最後に村井が最も高尚なものとしたのは、「天地を中心とする宗教的生活」であった。これは「宇宙の中心に理想と同情の存在を自覚し、之と和合交通するの生活」であり、「宗教的生活の極致」であると、村井は論

じた。そして最後に村井は、「予が理想する宗教的生活は以上陳べ来りし三種類のものである。(中略)約言すれば、予は自己に対しては王たらんことを勉め、人類に対しては僕たらんことを任じ、宇宙の『ハート』に対しては子たらんことを期して理想の宗教的生活を全ふせんと思ふのである」と、この論文を結んだのであった。

⑮「青年自修論」ではまず第一に「智力上の修養」を論じ、「十冊の書物を読むよりも一篇の論文を書く方が利益である」として、注入的教育法ではなく開発的教育法を、受動的勉強法ではなく自動的勉強法を採るべきだと説き、「唯知識の取次をなす水道とならず、新思想を湧出して人智の発達に貢献し得る泉沢とな」らねばならないとした。第二に「道德上の修養」を取り上げ、「今日社会の罪惡は知識の欠乏或は誤謬より来るよりも道德的意志の薄弱なるより来るものが大多数であると思ふ。(中略)去れば意志の力を養成することを力めねばならぬ。是れ予が云ふ道德的修養である」と論じた。最後に「精神の態度を高尚にし人間てふ自覚心」を養う「精神上の修養」を論じた。「精神上の修養」は「心靈全体に属する」ことであり、これは「宗教の本領」であり、そして「宗教の本体は神学でなく儀式でなく人生に対し宇宙に対し謹厳なる精神の態度を取る所に存す」と、村井は説いたのである。

⑯「婦人の特性」においては、村井は婦人の優れた特性として、第一に「精密 (Attentive Power)」第二に「模倣 (Imitative Power)」第三に「同情 (Sympathetic Power)」を挙げた。そして第一の特性「精密」から婦人は教育の分野に適し、第二の特性「模倣」は外国語の習得に適し、第三の特性「同情」は慈善事業に適すとし、村井は女子教育に従事している人々に対し、「(一)女子特有の天性を発揮するに勤むること(二)女子に適當なる仕事を供給」し、「女子をして将来社会の要素たらしめんこと」を切に願った。ちなみに村井は女子教育に大變関心が深く、本務の外国語学校教授の傍ら、成瀬仁蔵が一九〇一年(明治三四)に創立した日本女子大学でも教鞭をとり、親友成瀬を助け女子教育に当たったのであった。

⑰「人生の好伴侶」では、「書物」と「天地」と「宗教」の三つを、人間が生きてゆく上の好き伴侶とした。「書物」については説明の要もないが、「天地」については、ワーズワースの例をあげて、「此意味のある此美麗なる此神聖なる天地は即ち吾々の求むべき人生の好伴侶である」と説いた。第三に「宗教」については、「宗教の目的は其何宗教を問はず皆人間をして安心と喜びを以て生涯を渡らしむると云ふことである。(中略)此宗教を以て自分の生涯のコンパニオンとして始終之により自ら心を慰め心を励まして美しき生涯を送った人は、美

しき耶蘇基督であろう」と論じた。最後に村井は、「偉大なる著書、美麗なる天地、見えざる神」を三つの「人生の好伴侶」として、高尚なる生涯を送ろうと呼びかけたのである。

②③「真人物」では、「健康」・「実力」・「ヒュマニティー」・「宗教」の四つを、「本当の人間」の不可欠の要素として論じた。まず「健康」については、「由来宗教家といふ者はどうも健康といふものを軽んずる傾向がある」、キリスト教においても「甚しく肉体を賤しめるといふ様なことがあった」が、これは誤った思想で、「昔の諺の通り、健全なる思想は健全なる体格に宿る」のであって、人はみな健康の増進に努めねばならぬと、村井は主張した。次が「実力」である。「実力」がなければ、どのような理想も実現できないからである。第三が「ヒュマニティー」である。「健康」と「実力」が出来ても、「何れの方向に行くかという一つの大きな目安」がなければ、途を誤る。「実力」発揮の方向を指し示すのが、「ヒュマニティー人道主義」であると、村井は論じた。第四が「宗教」である。村井は、「既に健康あり実力あり、人道といふことが出来たらそれで完全な人間かと言へばモウ一つ欲しい、是れ即ちディビニティーである、人道に加ふるに天道、是は即ち宗教の領分に這入る、宗教といふ一つの趣味を持て居なければ、奥床しい所が無い、此大いなる趣味を得て、初めて其人が大なる人といへ

る」として、宗教の必要性を唱えたのである。最後に村井は、「私が今後大に主張せんとする所のものは、第一に無病強健の主義、第二は実力万能主義、第三には人道主義、第四には神人合一の主義、此信仰、此精神、此主義に依て、此健康、此実力、此人道、此天道、此四つを具備したならば、此人こそ真人、誠の人物といふことが出来るかと思ふのであります」と、この論文を結んだ。

## 七 新しい芽

いくつかの事典にある村井知至の項を見ると、彼が正統派キリスト教から転じて、「ユニテリアン主義を奉じた」ことは記されているが、後にはユニテリアニズムからも離れていったことはどれにも記されていない。村井の全生涯を研究した上で、事典の項目が執筆されたのではないことが一目瞭然である。

村井の宗教思想は、一九〇七年（明治四〇）頃動揺し始めた。<sup>(1)</sup>「日本の基督教は飽まで日本的でなくてはならぬ」と考えて、ユニテリアニズムに飽き足りなくなったのである。折しも友人松村介石が日本教会の名を以て新たな宗教運動を始めたのであるが、助力を乞われた村井は松村の趣旨に双手を挙げて賛同してその運動に協力した。しかしその松村とも、一九一二年（明治四五）頃から対立するようになった。村井によれば、それは

松村が教会本位の宗教を樹立しようとしたのに対し、村井は無教会主義の宗教を是としたからであった。<sup>(12)</sup>その後村井は一九二一年（大正一〇）にも宗教思想の大変化を来し、最終的には「仏教でもなく、又基督教でもない、すべての既成已存の宗教にあらずして、万人の胸奥に厳存する無名の宗教」<sup>(13)</sup>を信ずるようになったのである。そして父偏に母の「娧」いう字をつくり、これをかみと読まし、「私の外に神はない、神の外に私はない、神は私の凡てである、私の内に私でない私がある、是神也」<sup>(14)</sup>というようになった。

村井が宗教思想の大変化を来した後に発表された<sup>(2)</sup>「非宗教時代」において、村井が「基督教といふものも無くなるかも知らぬ、何といふ宗教が天下に満つるかといふならば、即ち無名宗、具体的に云ふたならば此のユニテリアンの奉ずる所の信仰箇条の如く、神を愛し人を愛するといふ大きな心が、人々の中に満つる、所謂宗教的精神が充実するといふ時代で、其宗門は、耶蘇教でも無ければ仏教でも無い、神道でも無い神の道人間の道といふものが、一般に実現することにならうと思ふ」と論じたのは当然としても、それ以前『六合雑誌』誌上にユニテリアニズムを鼓吹していた時に、すでにその宗教思想変化の兆しがあるのである。早くも村井は<sup>(11)</sup>「日本『ゆにてりあん』協会の真相」の中で、将来の理想の宗教は「仏教ともいへず、

基督教ともいはず、寧ろ仏教と基督教を同化し、東洋と西洋の思想を融合したる特色ある新宗教に相違ない」として、ユニテリアニズムを脱皮する視点を示しているのである。

<sup>(17)</sup>「二十世紀の宗教」においては、村井は宗教殊にキリスト教が一九世紀の学術の大進歩、すなわち進化論・歴史的研究法・比較研究法の影響により大進歩をなしたと指摘した後、「来るべき宗教は基督教と云ひ或は仏教と云ふ如き歴史的宗教にあらずして無名の宗教即ち新宗教である」と唱えたのである。

<sup>(18)</sup>「コムトの人類教を評して我が信仰の立場を明かにす」においては、村井はコントが「超越的の神の観念を否定したこと」は「人類教の長所」であるが、「人類を以て宗教の本尊となし、人類の外に神なく人類を神として礼拝する」点がその弱点であると批評した後、「予が信仰は人類の中に神の在すを認むのである。人類以外に神なく而かも人類は神ではない」と、自らの信仰の立場を明らかにした。そしてこの論文も、「過去の宗教が破れたことは事実である」とする新宗教の建設の必要性の示唆で結ばれているのである。

#### 結びにかえて

以上、『六合雑誌』における村井知至を、信仰の変遷・キリスト論・ユニテリアニズム・社会的キリスト教・社会主義

・人生論・新しい芽の七つの角度から紹介してきたのであるが、キリスト教界における村井の思想の位置を論ずることは、率直に言って私には荷が重すぎる。私の専門の社会主義運動史の面から言えば、安部磯雄と共に黎明期社会主義運動を理論的にリードしていった村井知至の思想なり理論を明らかにすることができたと思う。それはキリスト教ユニテリアニズム社会的キリスト教社会主義と図式化できる「基督教と異名同体」の社会主義であった。そのような社会主義理論をもって、当時の進取の気性に富む青年たちを社会主義運動の陣営に引き入れたのである。そして社会主義運動におけるキリスト教社会主義主義導の状況は、日露開戦の危機を契機に唯物論派社会主義者の幸徳秋水・堺利彦が平民社を結成し週刊『平民新聞』を発行して、社会主義運動のリーダーシップを握るまで続き、その後も唯物論派社会主義者との並存・協力期間が相当続いたのであり、さらに現庄にいたるまで鈴木文治・賀川豊彦・片山哲・河上丈太郎らに象徴されるようにキリスト教社会主義の流れは絶えることはなかった。そのようなキリスト教社会主義の創始者としての村井知至は、安部磯雄と共に高く評価されねばならず、彼らが最も多く論文を発表した『六合雑誌』には、研究者がもっともっと関心を払わねばならないのである。

(1) 村井はこの学校の名称を自伝『蛙の一生』では「先志学校」と

しているが、これは誤りで、バラが横浜山手四八番で開いていた個人的な英語塾のようである。詳しくは小玉晃一・敏子『明治の横浜』(一九七九年、笠間書院)五一ページ参照。

(2) 村井知至『英語研究苦心談』(一九二五年、文化生活研究会)一二～三ページ。

(3) 村井知至『蛙の一生』(一九二七年、警醒社書店)三三～四ページ。

(4) 同右四〇～二ページ。

(5) 同右五七ページ。

(6) 安部磯雄『社会主義者となるまで』(一九三二年、改造社)一七二ページ。

(7) 拙稿「キリスト教社会主義者安部磯雄」『文学』第四七巻第四号(一九七九年四月、岩波書店)一四一ページ参照。

(8) 村井と片山の交友関係については、拙稿『六合雑誌』における片山潜『キリスト教社会問題研究』第二七号(一九七八年、同志社大学人文科学研究所)七七ページ参照。

(9) 村井知至『社会主義』の内容については、住谷悦治「明治キリスト教徒の社会主義思想(1)——村井知至の『社会主義』について——」『キリスト教社会問題研究』第六号(一九六二年、同志社大学人文科学研究所)及び拙著『明治の労働運動』(一九七一年、紀伊国屋書店)六八～九ページ。

(10) 木村毅「明治前半期の社会主義思想と社会運動」『社会科学——日本社会主義運動史』第四巻第一号(一九二八年二月、改造社)七三ページ。

(11) 村井知至『蛙の一生』一五一ページ。

(12) 同右一六六ページ。

(13) 同右一六八ページ。

(14) 村井七六歳の時の詩。山岡保氏所蔵。

本稿執筆に際しては村井勇吾先生（村井知至の長男、元関西学院大学教授）から貴重な資料を拝借し、また数々の御教示を得た。記して深く感謝するしだいである。